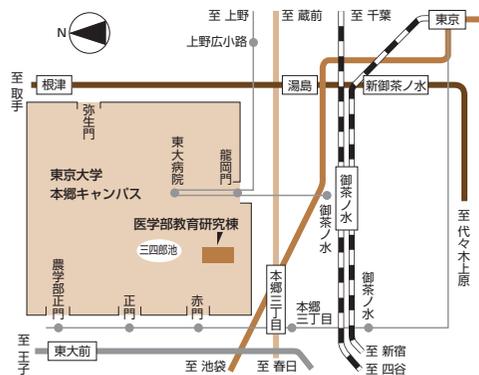


# 生きられる死



駅(地下鉄)から会場(医学部教育研究棟入口)までの所要時間  
 ◎東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」より徒歩10分  
 ◎東京メトロ南北線「東大前」より徒歩15分

お問い合わせ先

## 河合文化教育研究所

シンポジウム本部事務局

〒464-8610 名古屋市中種区今池二丁目1番10号

河合塾千種校内

TEL 052-735-1706 (時-9:00-18:00)

FAX 052-735-4032

東京分室

TEL 03-6811-5517 (時-10:00-18:00)

FAX 03-5958-1241

日本の美には破調が欠かせない。茶席で手にとった器が、つるんとしてシンメトリックであれば、何となく興奮めである。形のゆがみ、釉薬の垂れ、あるいは割れや接ぎの一つもないと、落ち着かない。そして縁の微妙な曲線に飲み口を見出す。塵一つ落ちていない庭を掃除するよう命じられた十七歳の利休は、樹をゆらして、あえて葉を舞い散らせた。

弓道も破調の美である。矢は、張り渡した弦の下三分の一のところにつがえられ、そして放たれる。的中するためであれば、洋弓のごとく、対称的であった方が有利である。にもかかわらず、狩猟でも、戦場でも、和弓は非対称でありつづけた。

弓道家は、的中に中てるだけでは評価されない。所作の美しさが問われるのであり、射はその所作の中にある。戦前、来日して禅と弓道に励んだドイツの哲学者ヘリゲルは、「的を狙ってはならぬ」という師のことばに当惑した。西洋人にはなかなか理解するのがむずかしいだろう。門外漢の気安さでいえば、的があってそれを射るのではなく、射のいとなみが、的という対象を生み出す。ここに効いてくるのが、和弓の非対称性、すなわち破調である。静謐さの中にまぎれ込んだクリナメンが、世界の開けを響かせ、達人ともなれば、紫電清霜の美にいたる。

ベルグソンのエラン・ヴィタールが「生のはずみ」と訳されているのをみたことがある。「躍動」や「跳躍」が定番だが、「はずみ」ということばには、何かドキリとさせるものがある。エラン・ヴィタールは、文字通り、生の原理である。同時に、潜勢的で、それ自身のなかに差異がはらみ、さらにはみずから引き裂く力を示している。そこから分化したのが知性であり、そして言語である。スタイリストであるにもかかわらず、言語嫌いのベルグソンは、それを十分に展開できなかつた。現実を離脱する軽やかさを認めながらも、そこに物質への親和性を嗅ぎ取っていたのだろう。

言語がもつ死の契機が最も顕著となるのは、それが命じる象徴的個体化の局面である。そしていったん個となった以上、社会と自己保存の桎梏が、「鉄の檻」のごとくわれわれの上ののしかかる。そこでは、進化の袋小路に迷い込んだごとく、生と死は個の水準に縮減されている。だが、個の中に刻印された死の痕跡を賦活させてみることはできないだろうか。

ヘリゲルの師、阿波研造は、暗闇で二本の矢を的中させてみせ、「私の中てたのではない。それが射るのである」と論じたという。個を去ることにより、原初のはずみがそこで鳴り響いた。ならば、ことばもまた、その始原において、祈りのように、あるいは呪いのように、暗闇に向けて発せられたのではないだろうか。それは自然から精神が生まれ出る瞬間である。ことばがはずむとき、個はしばし消滅し、開闢を告げる声が反復され、そこに鳴り響く。

(内海 健)

日時  
**2015年12月13日(日) 11:00-18:00**

会場  
**東京大学鉄門記念講堂**

〒113-0033 東京都文京区本郷七丁目3番1号 医学部教育研究棟14F

《参加費1000円(資料代含む)／学生無料》

11:00

**和田 信** (発表1)

「がんとともに生きる」

■ コメンテーターとの討論

12:00

**金森 修** (発表2)

「ビオスとタナトス」

■ コメンテーターとの討論

13:00

昼食 (～14:00)

14:00

**深尾憲二郎** (発表3)「内なる死のまなざし  
——てんかん、デジャヴ、臨死体験」

■ コメンテーターとの討論

15:00

**大橋良介** (発表4)

「脱け去る死でも、襲う死でもなく」

■ コメンテーターとの討論

16:00

休憩 (～16:15)

16:15

全体討論 (～18:00)

シンポジスト

**大橋良介** ● *Ohasbi Ryosuke*1944年生まれ。京都大学文学部卒業。  
ミュンヘン大学大学院哲学科学学位取得退学。  
日独文化研究所・所長。テュービンゲン大学客  
員教授。主著：『感性の精神現象学』（創文社）  
『Die Phänomenologie des Geistes  
als Sinneslehre』（Verlag Karl Arber）**金森 修** ● *Kanamori Osamu*1954年生まれ。東京大学大学院人文科学研  
究科比較文学比較文化専攻博士課程満期退  
学。東京大学大学院教育学研究科教授。専攻  
はフランス哲学、科学思想史、生命倫理学。主著：『サイエンス・ウォーズ』（東京大学出版会）  
『〈生政治〉の哲学』（ミネルヴァ書房）  
『ゴーレムの生命論』（平凡社）  
『科学の危機』（集英社）**深尾憲二郎** ● *Fukao Kenjiro*1966年生まれ。京都大学医学部卒業。  
帝塚山学院大学人間科学部教授。専攻は精神  
病理学。主著：『精神医学のおくゆき』（創元社 共編著）  
『生命と正常性——カンギレム、ミンコ  
フスキー、木村』（『いのちと病い』創元社）  
『精神病の深度と複数の時間性——アン  
テ・フェストゥム再考』（『空間と時間の病理』  
河合文化教育研究所）**和田 信** ● *Wada Makoto*1967年生まれ。京都大学医学部卒業。  
大阪府立成人病センター心療・緩和科部長。  
専攻は精神腫瘍学・精神病理学。主論文：「がん患者における心的外傷とPTSD」  
（『トラウマティック・ストレス』）  
「総合診療における心理療法」（『心理療  
法と医学の接点』創元社）

挨拶・全体討論

**木村 敏** ● *Kimura Bin*1931年生まれ。京都大学医学部卒業。京都  
大学名誉教授、河合文化教育研究所所長・  
主任研究員。  
専攻は精神病理学。主著：『関係としての自己』（みすず書房）  
『分裂病の詩と真実』（河合文化教育研究所）  
『木村敏著作集』全3巻（弘文堂）

総司会

**谷 徹** ● *Tani Toru*1954年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研  
究科哲学専攻博士課程単位取得退学。  
立命館大学文学部人文学科哲学専攻教授、間  
文化現象学研究センター長。専攻は哲学。主著：『意識の自然』（勁草書房）  
『これが現象学だ』（講談社現代新書）

コメンテーター

**野家啓一** ● *Noe Keiichi*1949年生まれ。東北大学理学部卒業。東京  
大学大学院理学系研究科博士課程（科学史・  
科学基礎論）中退。東北大学高度教養教育・  
学生支援機構総長特命教授。  
専攻は哲学・科学基礎論。主著：『物語の哲学』（岩波現代文庫）  
『パラダイムとは何か』（講談社学術文庫）  
『科学哲学への招待』（ちくま学芸文庫）**内海 健** ● *Utsumi Takeshi*1955年生まれ。東京大学医学部卒業。  
東京藝術大学保健管理センター教授。  
専攻は精神病理学。主著：『うつ病の心理』（誠信書房）  
『panse・スキゾフレニック』（弘文堂）  
『さまよえる自己』（筑摩選書）  
『自閉症スペクトラムの精神病理』（医学書院）